国立国語研究所学術情報リポジトリ

Diachronic Variation in Modern Japanese Literary Text : Analysis Based on Etymological Types Ratios and Part of Speech Ratios

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-03-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 近藤, 明日子, KONDO, Asuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001491

近代文語文の通時的変化の分析
—語種率・品詞率に着目して—

近藤 明日子（国立国語研究所コーパス開発センター）†

Diachronic Variation in Modern Japanese Literary Text: Analysis Based on Etymological Types Ratios and Part of Speech Ratios

KONDO Asuko (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

近代の非文芸ジャンルの文語文の通時的変化の実態を明らかにすることを目的として、『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ 1.0）を利用した語種率・品詞率の通時的変化について分析・考察し、次の(1)～(4)の結論を得た。(1)名詞率の増加が見られ、文語体の使用の場が評論的・随筆的文章から報道的文章に移行したことが背景として考えられる。(2)男性向け雑誌では漢語率の増加が見られ、名詞率の増加の影響だけでなく、語彙自体の漢語率の増加も背景として認められる。(3)女性向け雑誌では男性向け雑誌より漢語率が低い傾向が見られ、女性と和文体との強い関係が認められる。(4)接頭辞率・接尾辞率の増加が見られ、近代語における字音接辞の発展という事象が数値として確認できる。

１．はじめに

日本近代語の文章史・文体史は言文一致運動による口語体の成立・定着によって特徴付けられる。その口語体は小説では明治 30 年代に一般化したが、一方で、実用文とも呼ばれる論説文・報道文等の非文芸の文章において口語体が定着したのは大正期に入ってからであり、明治期は依然として文語体が主に用いられた。そして、明治初期には漢文訓読体・和文体・欧文直訳体等の複数の種類の文語体が行われたものが、しだいに融合し、明治後期に普通文と呼ばれる標準的な文語体が確立・定着することが知られる。しかし、標準的ともされる普通文の実態は、漢文脈の濃厚な文体から和文脈・洋文脈の濃い文体あるいはこれらの混交した文体までさまざまあり、決して一つの統一した文体ではなかった（森岡 1991a、p.25）。

このような複雑な様相を呈する近代の文語体実用文の変遷の実態の一端を明らかにするため、本研究では明治・大正期の雑誌の大規模なコーパスである国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ 1.0）[1]（以下、「CHJ 近代雑誌」という）を資料として、基本的な文体指標である語彙の語種率・品詞率の通時的変化の分析を行う。近代の文語体実用文に関する先行研究は多くあるが、対象資料の規模や扱う期間および調査する言語項目の数に限りのあるものが多く、近代の長い期間の資料を用いて通時的変化を俯瞰するような研究はまだ多くはない[2]。本研究では、先行研究に示唆を受けつつ、語種率・品詞率という新たな観点から通時的変化を大局的に捉えることを試みる。

---

† kondo@ninjal.ac.jp

[1] http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html

[2] 先行研究中、比較的長い期間の資料に基づき網羅的に言語項目を調査・分析するものとして、明治期の小学校教科書の助動詞を分析する岡本（1980）、明治・大正期の新聞の文末表現を分析する進藤（1981）、明治・大正期の小学校理科教科書や明治期の新聞の副詞・接続表現を分析する松崎（2006a・2006b）等がある。

２．利用するデータ

本研究では、CHJ 近代雑誌全 7,061 サンプルのうち、以下の①～④の条件を満たす 3,098 サンプルを抽出し、サンプル中の文語体地の文を分析対象とした[3]。

① ジャンルが「非文芸」（小説・戯曲・詩歌以外）のサンプル
② 文体が「文語」で本文種別が空値（＝地の文）の延べ短単位数が 100 以上のサンプル
③ サンプル ID の下 3 桁が「000」（雑誌本体の構造要素を扱うサンプル）のサンプルは除く
④ 著者の生年より判断し、近代より前に書かれた文章が地の文のサンプルは除く

表 1 に対象サンプルの言語量を雑誌種類別に示す。雑誌種類は雑誌タイトルと刊行年によって 10 種類に区別した。

表１　雑誌種類と言語量

雑誌種類（略称）	雑誌タイトル	刊行年	サンプル数	文語体地の文短単位数
明六雑誌（明六）	明六雑誌	1874･1875	149	159,270
国民之友（国民）	国民之友	1887･1888	1,099	907,483
太陽1895年（太陽Ⅰ）	太陽	1895	582	1,457,436
太陽1901年（太陽Ⅱ）	太陽	1901	391	1,282,299
太陽1909年（太陽Ⅲ）	太陽	1909	246	642,316
太陽1917年（太陽Ⅳ）	太陽	1917	75	235,373
太陽1925年（太陽Ⅴ）	太陽	1925	15	5,163
女学雑誌（女雑）	女学雑誌	1894･1895	463	421,777
女学世界（女世）	女学世界	1909	76	53,740
婦人倶楽部（婦人）	婦人倶楽部	1925	2	331
計			3,098	5,165,188

雑誌種類は読者層により大きく 2 つのグループに分けられる。明六雑誌・国民之友・太陽の 3 誌は男性の知識層が主な読者層であり（有山 1986、永嶺 1997）、女学雑誌・女学世界・婦人倶楽部の 3 誌は女学生や職業婦人といった知識層の女性が主な読者層である（田中 2006）。次節以降の分析結果に見られるとおり、この 2 グループ間の特に語種率のありようには大きな違いがある。

なお、両グループにおいて 1909 年以降言語量が急減するのは、当時、口語体の拡大・定着に応じて文語体が縮小・衰退していったことの反映である。1925 年の太陽・婦人倶楽部において非文芸のサンプルで文語体はほぼ用いられなくなっていたことが分かる。この言語量の少ない 1925 年の太陽と婦人倶楽部については次節以降の分析結果の扱いに注意が必要である。特に婦人倶楽部は言語量が極めて少なく、分析に堪えないと考え、以下の分析結果・考察ではとりあげない。

３．通時的変化

３．１．語種率の通時的変化

まず、語種率の通時的変化を見ていく。CHJ 近代雑誌の短単位の語種は 8 種類に分類されるが、その中で主要な 4 語種（漢語・和語・外来語・混種語）についてサンプル単位の

[3] 以下、コーパスデータの検索・集計は「CHJ 明治・大正編雑誌」のデータが収録されている国立国語研究所のデータベースを利用して行った。

比率の分布を雑誌種類ごとに箱ひげ図で示したものが図 1 である。なお、語種率の分析では、助詞・助動詞は対象外とした。

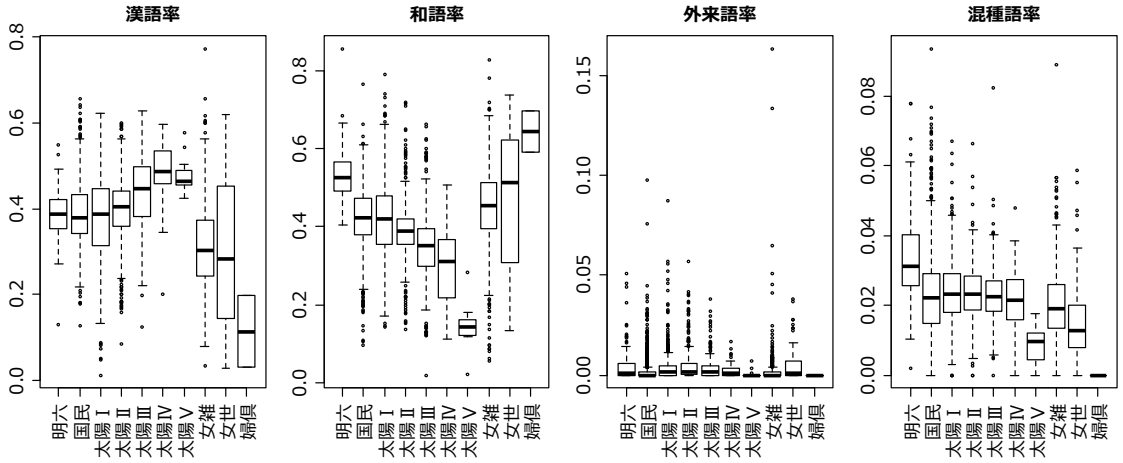

図１　雑誌種類別に見る語種率の分布

明六雑誌・国民之友・太陽の語種率を見ると、刊行年が新しくなるにつれ漢語率が増加し和語率が減少する傾向が見られることが分かる[4]。一方、女学雑誌・女学世界は、明六雑誌・国民之友・太陽と比較して漢語率が低く和語率が高い傾向が見られる。そして、刊行年が新しくなるにつれ漢語率が減少し和語率が増加する傾向にある。このように 2 グループ間で語種率の通時的変化は全く異なる様相を見せることが分かる。

３．２．品詞率の通時的変化

次に、品詞率の通時的変化を見る。CHJ 近代雑誌の短単位の品詞は大分類で 16 種類に分類されるが、そのなかで記号類（記号・補助記号・空白）以外の 13 種類の品詞についてサンプル単位の比率の分布を雑誌種類ごとに箱ひげ図で示したものが図 2 である。

明六雑誌・国民之友・太陽の品詞率を見ると、名詞・接頭辞・接尾辞が増加、代名詞・動詞・形容詞・副詞・連体詞・接続詞・助詞が減少、形状詞・感動詞・助動詞が増減なしの傾向にある。一方、女学雑誌・女学世界は、名詞・接尾辞が増加、代名詞・動詞・形状詞・副詞・連体詞・接続詞・助動詞が減少、形容詞・感動詞・接頭辞・助詞が増減なしの傾向にある。このように品詞率は 2 グループ間で類似の傾向を見せることが分かる。

４．考察

３．で見た語種率・品詞率の通時的変化が生じた背景について、明六雑誌・国民之友・太陽と女学雑誌・女学世界に分けて考察する。

[4] 田中（2010）では同じ 3 誌の漢語率について 1909 年以降減少するとしているが、これは口語文・文語文あわせての分析であり、そこで見られる漢語率の減少は、文語文よりも漢語率の低い口語文の拡大に応じた現象と考えられる。また、森岡（1991b、pp.381-382）の明治～昭和期の新聞での調査でも和語率は増加するとしているが、これも文語体・口語体あわせての分析である。

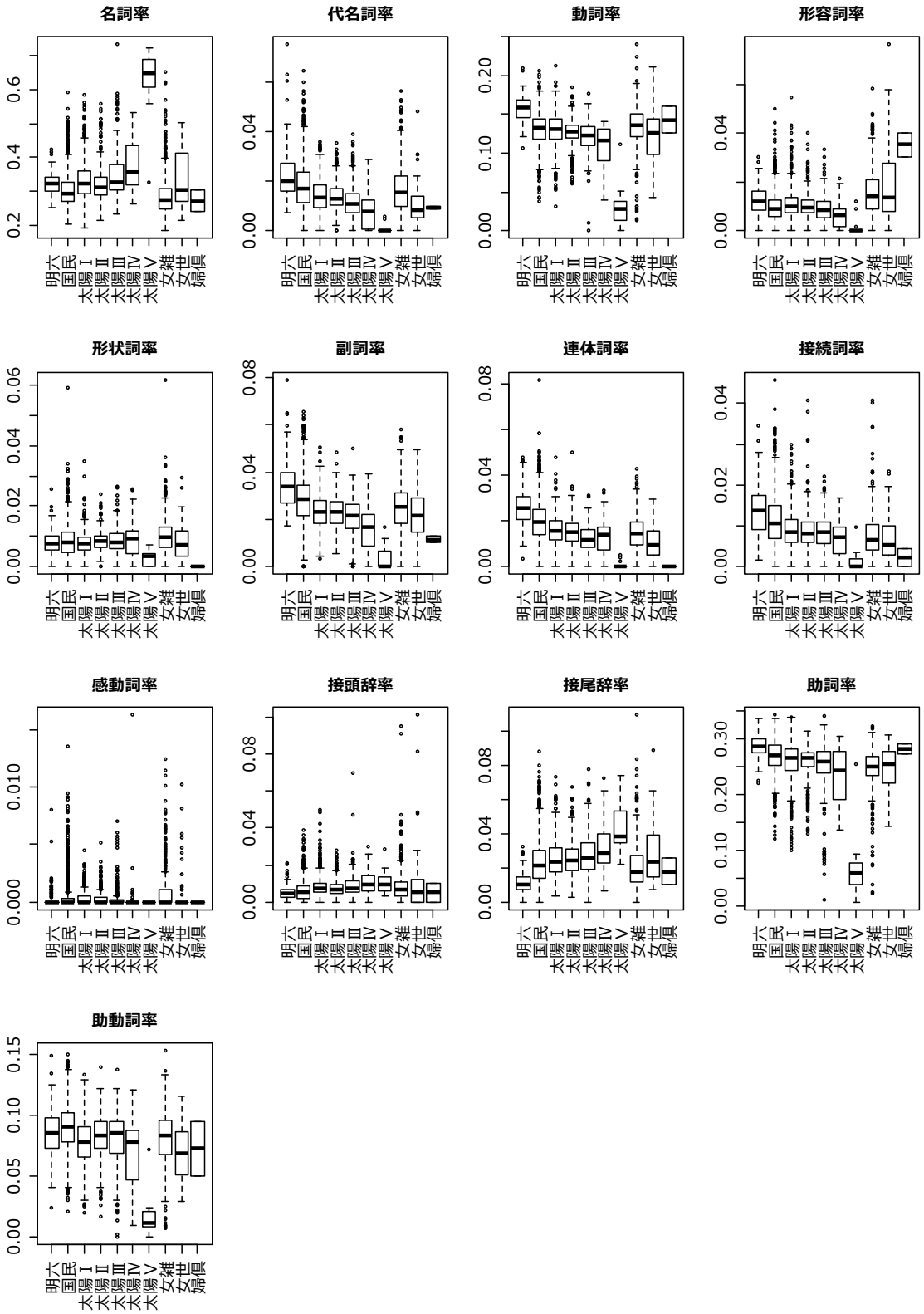

図２　雑誌種類別に見る品詞率の分布

４．１．明六雑誌・国民之友・太陽の考察

まず、明六雑誌・国民之友・太陽において名詞率が増加し、動詞・形容詞・副詞・連体

詞・接続詞の各比率は減少する点について考察する。樺島・寿岳（1965）は、自立語の品詞を名詞（N)、動詞（V)、形容詞・形容動詞・副詞連体詞（M)、感動詞・接続詞（I）の 4 組に分け、大正・昭和期の小説の調査から、N の比率が増加すれば V・M・I の比率は減少することを示し、また、少ない文字数に多くの意味を盛り込まなければならない要約的文章では名詞率が大きい傾向が見られるとした。

明六雑誌・国民之友・太陽の品詞率の通時的変化は、樺島・寿岳（1965）のいう名詞率とそれ以外の品詞率との関係に合致する。また、名詞率の高いサンプルを見ると、(1)～(3)の例のように事実を客観的に記述した報道的文章で、樺島・寿岳（1965）のいう要約的文章に通じる性質を持つものである。

(1) 支那西洋開化之差別　有賀長雄氏著　京都　大黒屋書舗發兌　日本商業教育論　高橋義雄氏著　東京　金港堂發兌　家計簿記法例題　藤尾録郎氏編　東京　經濟雑誌社發兌　英和書尺牘書法　井上十吉氏著　東京　吉岡商店出版支那西洋開化之差別は歴史上の事實を證據として東西兩洋の文明の相異なる所以を論じたり○日本商業教育論は商人にも學問の必要なる所以を論じたるものにて町人丁稚の爲めには心得となるべき書なり　（60M 国民 1887_09018「新刊雑書」名詞率 0.543）

(2) ○政治法律◎伊藤首相歸京　久しく熱海大磯にて療養中なりし伊藤侯は客臘十日歸京せり◎臨時首相解任　上記に付伊藤侯は客冬十二月十一日徳大寺侍從長の手を經て執奏を請ひ、左の如く西園寺侯の解任手續を爲せり。樞密院議長侯爵　西園寺公望内閣總理大臣臨時代理免らる（60M 太陽 1901_01060「海内彙報」名詞率 0.558）

(3) 解答方法　一、解答は東京市赤坂區青山北町五ノ二〇金易二郎　解答方法　一、解答は東京市赤坂區青山北町五ノ二〇金易二郎氏宛に送ること　一、解答は手順を明記し、變化あるときは合せ記入すること　一、締切七月三十一日限　一、解答は七月號の本誌にて發表す　（60M 太陽 1925_09079「懸賞詰將棋新題」名詞率 0.713）

このような文章は国民之友・太陽の名詞率 0.5 以上のサンプルに集中して出現し[5]、年を経るにつれ文語体サンプル全体に占める割合が増加する傾向が見られる。図 3 は雑誌ごとのサンプル単位の名詞率の分布をヒストグラムで表したものだが、ここから名詞率 0.5 のサンプルが年を経るにつれ増加する傾向が見てとれる。そして太陽 1925 年に至り、1 サンプ

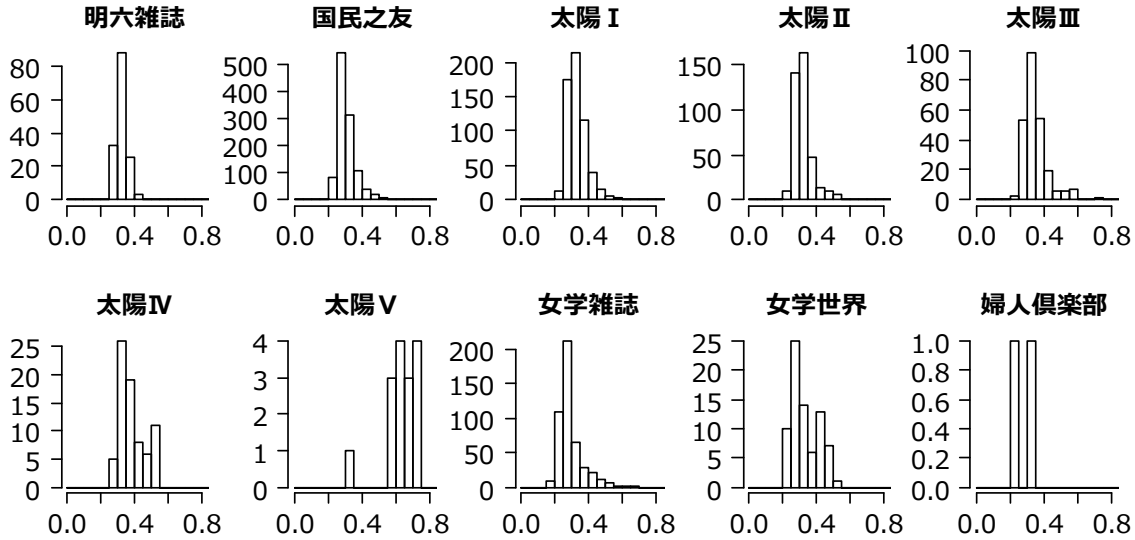

図 3　雑誌種類別に見る名詞率の分布

[5] 明六雑誌は論説文のみ掲載するため、報道的文章のサンプルは出現しない。

ルを除きすべてのサンプルが(3)と同内容の文章となるため、太陽 1925 年の名詞率は他の雑誌種類に対して突出して高くなる。

一方、名詞率の低いサンプルでは、(4)〜(6)の例のような、ある事柄について著者が主張を述べる評論的文章が多く見られる。

(4) 谷氏果然其の職を辭せり、心なき人は何とも云はば云へ、吾人は實に其の出處進退に於て、毅然たる大丈夫の動作に孤負せざるを信ず、谷氏朝を去る、然れども其の意見は朝を去らず、豈にただ朝のみならんや、顧ふに一篇の意見書は恰も噴火山の如く、万丈の光焔を吐き來りて、天下の人心を警醒作興せり、
（60M 国民 1887_07008「谷氏果然其の職を辭せり」名詞率 0.205）

(5) 太陽には社會改良意見を連載し來りしも、久しきことながら、何れも教育を以て、根本より改良するの外なしといふに歸着せざるはあらず。文部省が、新中學令に於て、音樂の一科を加へたるは、中學生をして、優美健全なる音樂の趣味を解せしめ、卑猥なる俗歌俗曲の爲めに、動もすれば導かれて、其嗜好の正當を誤まる如きの弊を一新せんとの希望に外ならず。
（60M 太陽 1901_04016「社會の腐敗救治意見」名詞率 0.226）

(6) 電車ばかり世に簡便廉價なるものはあらじ、貧しきものと、富めるものと、貴きも、賤きも、みな此便利なる文明の器械によらざるは希なり、加之近ごろは運轉手もよくなれて、怪我人も少なく、車掌も段々丁寧になりしは喜ばしき事なり。
（60M 太陽 1909_11051「牛門隨筆」名詞率 0.273）

以上のことから、名詞率の増加の背景の一つとして、文語体の用いられる文章の種類が、評論的文章から報道的文章に変化していったことがあげられると考える。

次に漢語率の増加について考察する。樺島（1963）は大正・昭和期の小説の調査で、漢語文節の比率が増すと名詞文節の比率も増す傾向が見られ、漢語の比率は名詞文節によって強く支配されるとした。延べ語数に対して最も比率の高い品詞は名詞であることから、その名詞の漢語率が全体の漢語率に最も強い影響力があるのは当然と言える。CHJ 近代雑誌の短単位では、活用語の語種は和語・混種語のいずれかであり漢語とはならないため、自立語のなかで名詞の次に比率の高い動詞の漢語率は全体の漢語率に影響力を持たず、名詞率が漢語率に与える影響はいっそう強い。よって、漢語率の増加は名詞率の増加が第一の背景となっていることは疑いない。ただし、品詞ごとにサンプル単位の漢語率の分布を箱ひげ図で表した図 4 から、名詞・形状詞・副詞・接頭辞・接尾辞で漢語率の増加が見てとれることから、全体の漢語率の増加は、名詞率の増加だけを背景とするのではなく、語彙自体の漢語率の増加という通時的変化ももう一つの背景となっていることが分かる。

最後に、接頭辞率・接尾辞率の増加について触れておく。これは、図 4 に見られる接頭辞・接尾辞の漢語率の増加傾向と合わせて、野村（1981）・松井（1987）にいう近代語における字音接辞の発展を反映したものであり、それが具体的数値として確認できたものと考えられる。

４．２．女学雑誌・女学世界の考察

まず、女学雑誌・女学世界の名詞率の増加について考察する。これは、明六雑誌・国民之友・太陽同様、文語文の用いられる文章の種類が評論的文章から報道的文章に変化していったことを背景の一つとしていると考えられる。図 3 からも女学世界のほうが女学雑誌よりも名詞率の高い区間に多くのサンプルが分布していることが分かるが、このような名詞率の高いサンプルは(7)〜(8)の例のような報道的文章で占められる。

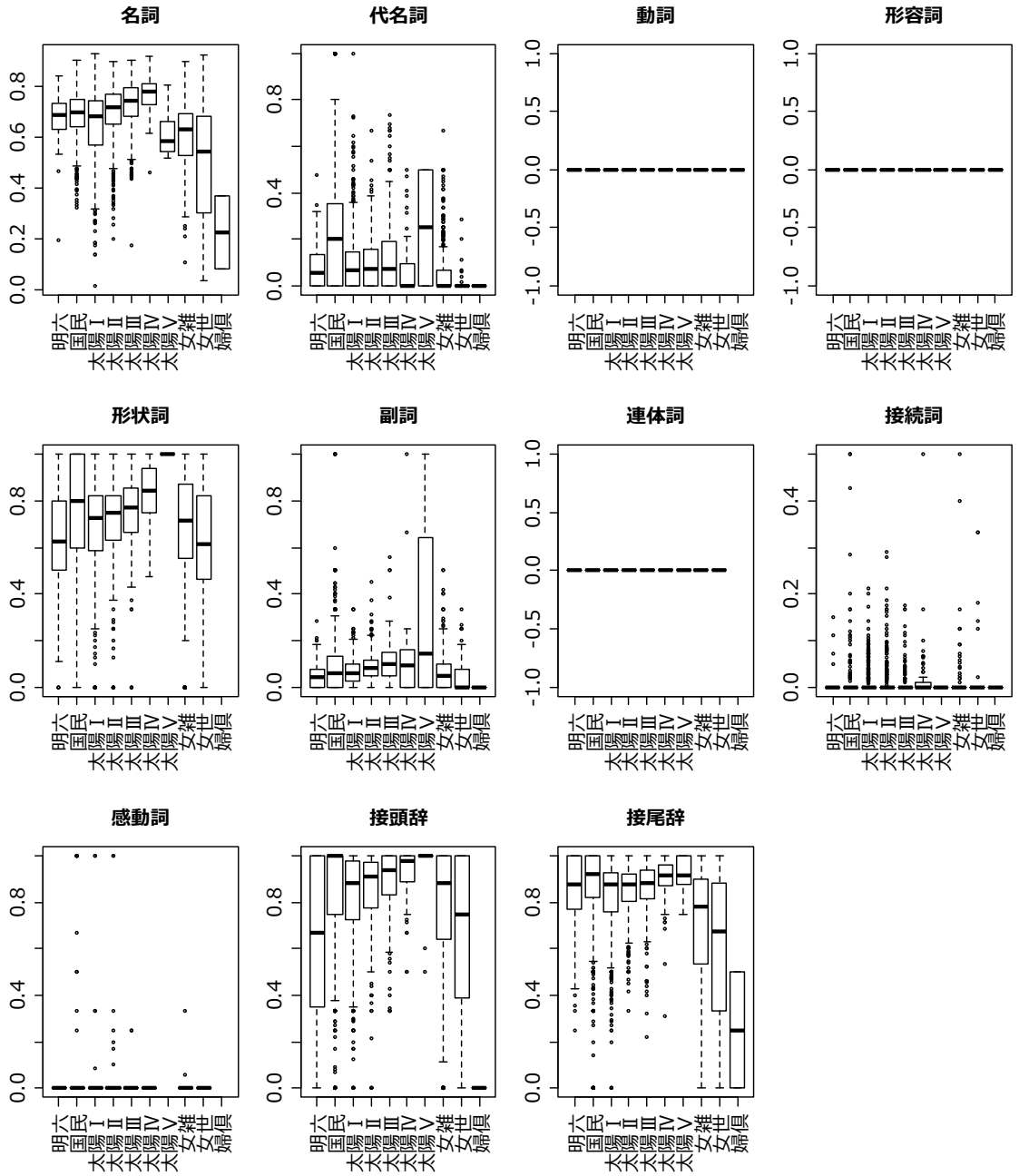

図４　品詞・雑誌種類別に見る漢語率の分布

(7) ○寄付金件　今回朝鮮事件に關し本社事業費の内金品寄付申出たるもの左の如し　一晒木綿三十段　廣島縣正社員　青盛數馬　兵庫縣正社員　三崎安二郎　同　三崎弘造　一金五拾圓　同　小谷廣吉　同　加納辰三　一金壹圓　宮城縣　鈴木志惠　一金壹圓　同　亘理きう　一梅千五樽　三斗入

（60M 女雑 1894_32016「日本赤十字社録事」名詞率 0.652）

(8) 麹町區下二番町に在りし女子音樂園は、今般豐多摩郡下澁谷に移轉新築せしにつき、五月六日午後二時より落成式を舉行せり、園主松山溢子刀自の開會の辭に次で加藤弘之男の祝詞（代讀）、坪井、三宅、兩博士及び青木文造氏の演説あり、其よりのピアノ、ヴアイオリン、合唱、箏、等生徒の演奏、數番あり、

（60M 女世 1909_08024「女子音樂園落成式」名詞率 0.503）

逆に名詞率の低いサンプルには(9)〜(10)のような評論的文章が多く見られる。

(9) 斷えず人を怨んで不平勃々たる者よ。試ろみに問はん、汝、一人にても心を許して身を托せんとするの友ありや。汝は曰はんとす、世に知己なしと。左れど、汝に問はん、抑そも汝が知り、汝が尊とみて、仕へんとするの長者はありやと。汝は曰はんとす、一人もなしと噫、あはれむべし、此種の人。
（60M 女雑 1894_34008「人相ひ評するを聽く」名詞率：0.197）

(10) 人は能く言ふ、我が理想は斯の如し、我れは斯の如くありたしと。なれど其の能く實現されたるもの世間果して幾人かある。舅姑のなき家に嫁がんと思ひしものも、實際は、之れあるのみならず、兄弟姉妹其の他親族の同居さへする家に婚を結び、又富裕なる人にと思ひ居りしものも、家もなく、衣も乏しく、食さへ豊かならざる悲運に陥り居るは、世間なべての例にあらずや。
（60M 女世 1909_13032「修養手引草」名詞率 0.245）

次に漢語率の減少について考察する。これは明六雑誌・国民之友・太陽とは逆の傾向であり、樺島（1963）のいう傾向とも合致しない。図 5 は雑誌種類ごとにサンプル単位の漢語率の分布をヒストグラムで表したものだが、女学世界では、特に漢語率の低い区間にサンプルが多く分布していることがわかる。

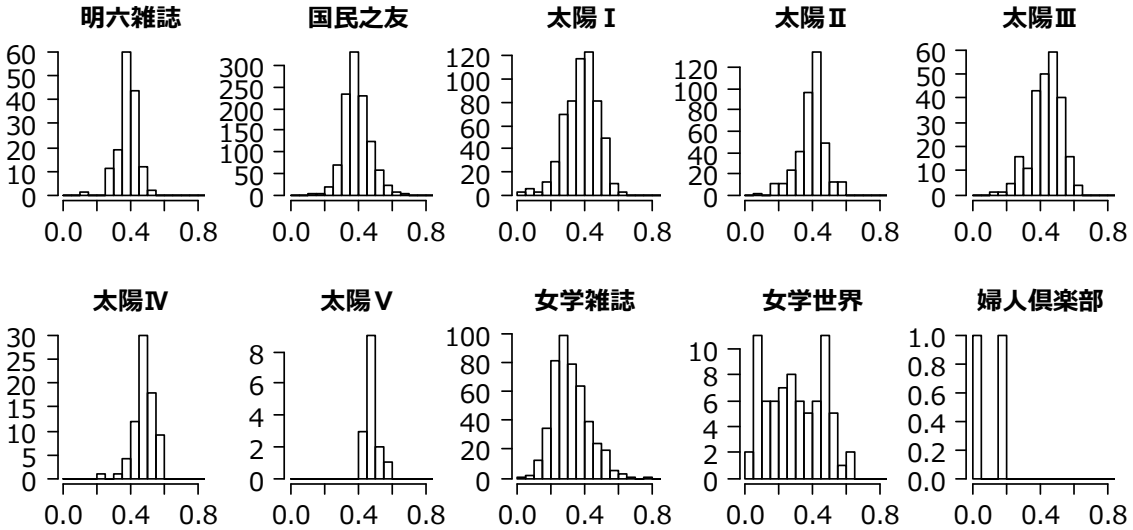

図 5　雑誌種類別に見る漢語率の分布

この女学世界の漢語率の低いサンプルのほとんどが(11)のような読者投稿による随筆的文章である。

(11) 淋しさは、秋の夕ぐれならまし、たえかねて庭そぞろあるきするに、そこここより蟲の音いといとあはれに聞ゆ、花だんにたちよりて見るに、うつくしかりし昔はいづこ、花もなき小町草のうなだれて、やり水にうつせみの息つなぎ居るあはれ、げに、古しへの卒塔婆小町の、うつろひし姿、水にうつしてかへらぬ春の永き日をかこちけるにさも似たり。　（60M 女世 1909_16075「秋の夕ぐれ」漢語率：0.029）

このような読者投稿のサンプルは女学雑誌にはない。このサンプル群の存在が女学世界の漢語率の分布に大きな影響を与え、漢語率が低下しているように見えている面があると

考えられる。

最後に、女学雑誌・女学世界の漢語率が明六雑誌・国民之友・太陽よりも低いことについて考察する。特に漢語率の低いサンプルが集中して出現する女学世界のみならず、女学雑誌も図 5 に見られるように明六雑誌・国民之友・太陽よりも漢語率の低い区間にサンプルが分布する。この背景として読み手の性差を考えたい。女性は主に和文を読み書きし漢文訓読系の文章とは疎遠であった歴史があり、それが近代の文語文においても続いていたということである。それは、(9)～(10)のような評論的文章においても(11)のような随筆的文章においても同様に見られる傾向であったことが分かる。

５．おわりに

以上、本研究では、近代の文語体実用文の通時的変化の実態を明らかにすることを目的として、CHJ 近代雑誌を利用した語種率・品詞率の通時的変化について分析・考察した。そこから明らかになったのは、名詞率の増加という通時的変化から見えてきた、文語体の使用の場が評論的文章から報道的文章に移行していく実態であった。また、漢語率の増加も見られ、その背景として名詞率の増加の影響だけでなく、語彙自体の漢語率の増加も認められた。さらに、読者の性差による文語体のありようの差異や近代語における字音接辞の発展という事象も語種率・品詞率から確認することができた。

今後、語種率・品詞率以外の観点も加え近代文語文の通時的変化を多角的に分析するとともに、口語文との比較を交えて、実態の更なる解明を進めていきたい。

謝辞

本研究は、科研費基盤研究（C）「形態論情報付きコーパスを活用した近代日本語の位相の計量的研究」（16K02750）および国立国語研究所言語変化研究領域共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一部である。

参考文献

有山輝雄（1986）「言論の商業化―明治 20 年代「国民之友」―」『コミュニケーション紀要』4、pp.1-23

岡本勲（1980）「明治文語の助動詞の位相」『中京大学文学部紀要』15:2、pp.53-98

樺島忠夫（1963）「漢語をめぐって」『計量国語学』27、pp.14-19

樺島忠夫・寿岳章子（1965）「2．要約的表現と描写的表現」『文体の科学』pp.16-49

進藤咲子（1981）「第四章　新聞の文体」『明治時代語の研究―語彙と文章―』明治書院、pp.245-270

田中牧郎（2006）「『近代女性雑誌コーパス』の概要」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(B)「20 世紀初期総合雑誌コーパス」の構築による確立期現代語の高精度な記述』pp.55-62（http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/doc/19w-mag-summary.pdf よりダウンロード可能）

田中牧郎（2010）「雑誌コーパスでとらえる明治・大正期の漢語の変動」『国際学術研究集会　漢字漢語研究の新次元　予稿集』pp.56-63

永嶺重敏（1997）「第三章　明治期『太陽』の受容構造」『雑誌の読者の近代』日本エディタースクール出版部、pp.101-132（本研究ではオンデマンド版[2004]に拠った）

野村雅昭（1981）「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』49:10、pp.22-34

松井利彦（1987）「漢語の近世と近代」『日本語学』6:2、pp.25-36

松崎安子（2006a）「明治期の文語文の類型―小学校理科教科書を対象として―」『文化』70:1-2、pp.92-105

松崎安子（2006b）「明治期の新聞における文語文記事の文体類型―小学校理科教科書の文体との比較から―」『文芸研究―文芸・言語・思想―』162、pp.11-22

森岡健二（1991a）『近代語の成立―文体編―』明治書院
森岡健二（1991b）『改訂近代語の成立―語彙編―』明治書院